

2015.10.31 日本アーツビジネス学会設立大会 パネルディスカッション  
『地域価値としてのアーツをどう育てていくのか～藤野ふるさと芸術村構想から30年』

モデレータ(野口)：

ここからは『地域価値としてのアーツをどう育てていくのか～藤野ふるさと芸術村構想から30年』と題して、議論を進めていきます。アーツビジネスを学んでいく上で、地域(ローカル)という概念は、一つの大変なキーワードになると、私は考えています。アーツは本来的にその特性において全国一律や標準化にはなじまないものであり、その地域に固有のアーツあるいはアーツビジネスのあり方が理想だと考えるからです。

本日は、その一つの事例としてアートのまちであるここ藤野を取り上げたいと思います。詳しくはのちほどパネリストからもお話があると思いますが、旧藤野町(現在は市町村合併により相模原市緑区になっています)では1986年にふるさと芸術村構想が始まり、移住してきたアーティストや住民の手によって約30年かけて独自の成長を遂げてきました。その歴史的意味や現在の姿および未来への手がかりについて、芸術村づくりを担ってきた各方面的リーダーに語っていただき、その後、全体で気になるキーワードを拾っていきながら、共有できる文脈をあぶり出していけたらと考えています。

それでは、パネリストのみなさんをご紹介します。アーティストとして地域のリーダー的役割を担い続けていらっしゃる高橋政行さん。行政の立場として当時藤野町役場に勤務していました中村賢一さん。神奈川県の立場から主に芸術の家開設を主導された井上憲司さん。事業家の立場から試行錯誤を繰り返されている桑原敏勝さんです。では、はじめに中村賢一さんから始めていただきましょう。

中村：

私は旧藤野町役場で32年間勤務し、ふるさと芸術村構想に行政の立場でかかわり、その後は現在まで一市民として促進する役割を担っています。1988年にふるさと芸術村が事業として実際にスタートを切る3年ほど前の企画段階から、まずは制約条件としてあったのが神奈川県民の水がめとしての相模湖の存在です。80年代後半のバブル期まったく中でも、工場誘致等による活性化はあり得ず、自然と共生したまちづくりの方向性しか選択肢はありませんでした。それがアートと結びついてきました。

芸術村構想の種は、実はもっとさかのぼって戦時中にありました。当時藤野に疎開していた藤田嗣治ら著名な洋画家8名を中心に構想を練っていたらしいのです。これは実現せず幻に終わりましたが、このような事実が背景としてあった影響は少なくないと思います。

芸術村構想が実行に移されてから約30年たちましたが、立上げのときは神奈川県が主導したものの、時間の経過とともに地域で引き受け継続していくことが求められ、旧藤野町は、いかに町民の暮らしに根ざしたものにしていくかに悩みながら、数百万円レベルの予算で「アーツスフィア」というイベントを地道に続けてきました。また、アーティストたちへの空き家の斡旋もやってきました。

た。この取組みで、250名を超えるアーティストが住むようになり、また、地域住民が自ら、知恵を出し、汗をかいてイベントの企画・運営の中心になっています。

現在では、藤野ぐるっと陶器市、ひかり祭り、こもりく／つなごもり、藤野村歌舞伎、ぐるっとお散歩篠原展、サニーサイドウォーク等々 年間を通じて各種アートイベントがひしめき合うほどの状況になっています。モノよりも人材を誘致したこの取組みは、外部からの評価も高く、週刊ダイヤモンドに掲載されたり、NHKでもとりあげられました。その意味では、個性豊かで多種多様なアーティストたちが集い、かつアートが自然環境や住民の生活とも密接につながっている藤野の貴重な地域価値は他に誇れるものに育ってきているのではないかでしょうか。

桑原：

私が藤野にかかわりを持ち始めたのは、1980年頃でした。アーティストら面白い人たちがたくさんいるところに惹かれたからです。その後、藤野に移住し、いまは農業生産法人を立ち上げて、無農薬野菜の生産・販売や体験農園、農園レストランを手掛けている一方で、小さなギャラリーが集まる場所や、アーティストが制作現場を見てもらいながら作品を売ることのできる場所をつくりしています。

アートにかかわる事業を始めたのは、これだけステキなアーティストが多くいるのに、生計を立ててのに苦労している状況に多少でも貢献できないかということがありました。また、米国に在住していたとき、近くにサンタフェというアートのまちがあり、その中にギャラリーがあったという記憶が強く残っていたこともあります。

ただし、ギャラリーをつくってもなかなか売買が増えないかという現実にも直面しています。私なりに分析すると、欧米と日本では明らかに住環境が違うということが要因の一つでしょうか。日本の家には一般的に絵をかけるような空間が十分にはありません。ただ、日本でも昔は床の間に掛け軸を飾っていたことを考えると、生活文化としてアートを取り入れられる可能性もなくはないでしょう。

もう一つは、欧米と日本のアート観の違いもあると思います。欧米では、アーティストもお客様も、なぜそれをつくったのか、なぜ買ったのかを、よくしゃべります。日本ではアートは言葉で語るべきものではない、人間の作為のにおいがするものより自然なものがいいという感覚が強いようです。日本のアート観は、私自身共感できる部分も大きいのですが、日本人が世界中の料理を受け入れているように、アートの多様なあり方をもっと受け入れていいのではないかでしょうか。私はこれから事業家のひとりとして、もっと気軽に作品を売り買いく「アートマルシェ」のようなものをつくろうかとも考えているところです。

井上：

私は10代を九州で、20代をドイツで過ごした後、30代で神奈川県の長洲知事（当時）からお誘いを受け帰国し、県庁に勤務しました。最初の仕事は県と相模川流域の市町で策定した12の整備計画をプロジェクト方式で競争しながら推進していく提案をしました。旧藤野町については水源

地としての規制が厳しいため、どんな提案をすべきか最後の最後まで悩みました。迷ったときは歴史に紐解けということで、戦時中に疎開した洋画家たちが、この地の自然環境に魅せられ、夢の芸術村を構想していたということに着目して、藤野ふるさと芸術村構想を最終的に提案することにしました。

私はドイツに在住した10年間で、先進的な市民参加型行政のまちづくり手法を学ぶ一方で、日本のよさもたくさん再認識しました。とりわけ私の意識の中で確信したことは、日本人が災害も含めて自然と共に生きて、自然の恵みやさまざまなエネルギーを受け止め、寄り添い、活かしながら、自分たちも豊かになっていく営みと技術を身につけ文化にまで高めたということでした。

藤野には丹沢山系の西の砦としての森があり、その東には3200万人が住む首都圏があります。丹沢の森から水源の恩恵を受けている都市住民に創造的なメッセージを送るという貴重な使命を、芸術村構想に込めようと考えました。

芸術村構想30年の歴史の中で、私が直接かかわったのは1984年から91年までの7年間ですが、その間に美しい自然や芸術を通じて表現された作品が数多く制作されました。例えば、ニ尔斯・ウドという作家が、藤野町の使命ともいえる水の環境保全のために、竹を組み合わせた大きな鳥の巣の作品(バンブーネスト)をつくりましたが、これは鳥が生き続けるための生の営みを人々流転とし見事に象徴するものになりました。

また、ここに同席されている高橋さんに依頼して制作された「山の目」という作品については、山を彫刻するという大胆な発想に度肝を抜かれました。地域の人たちにとって見慣れた日常を芸術の力を借りて非日常の空間にすることで、作品の場の意識やこの地の豊かさの再認識につながり、芸術村の次なる展開への原動力になったのではないかと思います。

高橋：

私と藤野の最初の接点は、37年前のことでした。それには私のライフワークとの深いかかわりがありました。アートの歴史において、人間と人間のテーマについてはやり尽くしてきたのではないかと感じていました。私は、自然環境と人間の交流が、21世紀におけるアートの新たなテーマになると直観していたので、藤野に目が向いたということです。

さきほど井上さんから話があったように、芸術村構想の一環として県から「野外環境彫刻展に参加してください」と依頼があったとき、環境彫刻という言葉を聞いたことはありませんでしたが、自分自身のテーマとシンクロするのではということで賛同し、参加することにしました。最初の年に「山の目」をつくり、大きな反響がありました。この成功で、アートをまちづくりの原動力にするということに地域としても自信を持ったように思います。翌年は、町役場の中村さんから依頼があって「緑のラブレター」をつくりました。

私の専門は「パブリックアート」という分野で、公共事業に付随する彫刻、オブジェ、シンボルといった野外系の造形をずっとやってきましたが、ここでは暮らしとアートをつなぐ、地域とアートをつなぐという課題が必須です。アーティストのエゴではやれません。つまり、地域の人の声を聴かないかぎり次はないということです。

一方で、藤野の地域経済とアートがどんな関係にあるのかの話も少ししたいと思います。正直、人口1万人のこのまちの規模ではアートで経済に影響を与える役目を果たすことは無理だと考えていました。ところが、やっていくうちに、お金の流通以外の経済的な効用が大きいことに気づいたのです。

つまり、このまちで行われているアートのさまざまなイベントでは、ものの売り買いというよりは、物々交換的なことも盛んに行われており、これはアートが地域における独自の交流の「場」づくりを促進し、NEXT貨幣経済のようなものをひらいていくことに貢献する可能性を示しているようにも思います。

そもそもアートは人間にとて多様性のシンボルと言えます。なぜなら、アートはさまざまな価値観を柔軟に受け入れないかぎり、その時代を表現できないからです。だから、きっかけはアートであっても、それが他の分野、例えば農業だとか企業ビジネスにだって波及効果を持ち得るはずです。

小林：

アートと経済あるいはビジネスを直線的に結びつけることは慎重に考えた方がいいですね。アーツの真ん中には心があり、心が数量では測り得ない特性からすれば、「アーツビジネス」の本質とは何かをもっと考えていく必要があるように思います。

野口(モデレータ)：

4人のパネリストのお話を私なりに解釈すると、藤野の芸術村としての歩みを通じて、自然と人間の調和を取り持つアートのあり方ということが、表現は違いながらも、共通するテーマであったように思います。小林さんの話にもあったとおり、藤野における取組み事例からアートとビジネス／経済のつながりをどのように考えるかについてそれぞれのご意見を伺うことで本日のパネルディスカッションを締めくくりたいと思います。

井上：

私は、アートとビジネスの関係を議論する前に、アートと社会のつながりに言及する必要性を感じます。ヨーロッパでは、都市空間の形成や社会秩序のあり方に批判したり物申すような芸術作品が多数見られ、市民が芸術を通して市民権やデザインの基準を勝ち取った事例を多く見てきました。

ところが日本では都市そのものがまだ文化として成熟していませんから、そこにアートを持ち込んで説得力を持ちません。しかし、日本には自然環境との共生の中でつくり上げた文化、歴史、伝統が脈々と息づいています。この領域においては、日本ならではのアートの存在や表現の仕方があり得るし、それらを世界に対して積極的に発信していくべきものでしょう。藤野はその先鞭をつけるという重要な位置づけを担っているではないかというのが私の考え方です。

高橋：

アートの機能性に注目すると、お手本のない状況の中でも問題解決能力が高いということではないでしょうか。アートは人が見たこともないことを提示し、日常をひっくり返すことが宿命で、それでこそ人々に感動を与えるのです。その意味で、ビジネスを貨幣経済のみが選択肢であるという固定概念で考えるだけではなく、市民のボランティア活動だったり、企業の社会貢献等も含めたところで、もっと多様な見方で捉えることが必要ではないでしょうか。「アートをビジネスにどう活かすか」というのは、貨幣経済ありきの発想を前提にした問いで広がりがありません。それよりも「アートとビジネスがお互いに刺激を与え合うには」といったようなテーマで考えることが適當ではないでしょうか。

桑原：

リーマンショック以降、お金の問題はこれでいいのかということが、世界中の課題になっています。日本における高度経済成長も、あれが豊かだったのかという疑問があるでしょう。経済をもっと広い視野で見据え、これまでと違った新たなコンセプトを考え出すことが必要でしょう。アートビジネスのあり方は、まさにこのテーマと重なります。ただ、さきほども述べたように、欧米と日本のアート観の違いをまずは乗り越えることから始めなければならないでしょう。自分としてはそのような時代の変わり目にかかわっていけることに幸せを感じています。

中村：

これまで空き家の斡旋などをやってきたこともあって、藤野には250人のアーティストたちがいます。なかなかお金にはなりにくいようですが、一人ひとりが自己実現を図っていることは間違いないでしょう。このまちには、昔から大資本とヤクザは寄りつかないとと言われてきました。それは当たり前です、儲からないわけですから(笑)。しかし、一方では面白い現象も見られます。大きく儲かりはしませんが、身の丈で持続可能な小商いが増えてきているということが最近の傾向としてあります。例えば、この地域で唯一の養蚕農家で、かつアーティストでもあるカナダ人がいます。彼は蚕を自分で育て、それから採れた生糸を藍染にし、スカーフなどをつくって売っていましたが、20年くらいはなかなか生計も成り立たないようでした。ところが、そのプロセスをワークショップとしてソフト化し、ブログで情報発信するようになったら、世界中からそれを求めて人が集まり、ここ5年くらいで経済が循環するしくみが出来上がりました。その周辺では、食事や宿を提供するという仕事も必要とされるわけです。発想をちょっと変えると、アートとビジネスがうまいところでつながった好例かと思います。

野口(モデレータ)：

アーツビジネスをこれから考えていく上で、パネリストの方々のご意見には、ヒントになるところが多々あったように思います。このあたりで本日の議論を区切らせていただきます。ありがとうございました。